

●希少な巨木群落形成

ツバキは日本人になじみの深い花木だが、西都市尾八重のウラクツバキ（有楽椿）は普通のツバキとは違う。一九九一（平成三）年、三本（うち一本は枯死）が県天然記念物に指定され、市は同地区に「有楽椿の里」を開設、保存・顕彰に努めている。

ウラクツバキは室町時代のころ、中国から輸入されたツバキと日本のヤブツバキとの間にできたと推定されている。織田信長の末弟に長益という大名がおり、茶道を究めて有楽流の祖となった。権力争いを避け、髪を下ろして豊臣秀吉に仕え、織田有楽斎（うらくさい）と称した。有楽斎が茶席の花として愛用したことからウラクツバキの名が付いたと言われる。

安土桃山時代から江戸時代にかけて將軍家、公家、大名、豪商など上流階級の間にも広まった茶の湯の席で重宝された。花は薄桃色に紫を帯

びた色をしており、十二月から咲き始めて四月ごろまで、花期が長いのが特徴。

十数年前、ウラクツバキが尾八重地区にあることが分かり、専門家による調査が行われた。その結果、全国的にも珍しい巨木群落を形成していることが明らかになった。

現在、同地区で確認されているのは六本。このうち、県の天然記念物に指定されているのが「樫木尾（もみぎお）ウラクツバキ」と「大椎葉ウラクツバキ」の二本。樫木尾ウラクツバキは樹齢約五百年、幹回り二・四三メートル、高さ九・八メートル、日本最大級とされる。大椎葉ウラクツバキは幹回り一・七二メートル、高さ九メートル。

このほか、もう一本天然記念物に指定されていたが、二〇〇一（同十三）年、枯死した。同地区以外では隣接する木城町中之又の幹回り一・七八メートルのウラクツバキが九五（同七）年、

天然記念物に指定されている。

植栽で特徴的なことはいずれも墓地、屋敷周辺など特定の場所に植え込まれていること。ウラクツバキは葉の外周りがのこぎりの歯の形をしている。昔からのこぎりの歯の形は魔よけの力があると言われており、そのこととの関係が推測される。

数百年前、何人かによって京都などから運ばれ、繁茂したのであろう。それは中世期、熊野から米良地方を往来したという熊野修験道者かもしれない。

「有楽椿の里」は九八（同十）年の開設。園内には休憩所などがあり、散策に訪れる人も多い。

日高正晴



有楽椿の里。樫木尾ウラクツバキがあり、散策に最適